第三講　演習問題(3)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

さるほどに、姫君七歳と申す春の頃、桜の咲き乱れたるを御覧じ給へば、幼き者二人来たり遊びゐた[a]るを、三十ばかりの男、二十六七の女房来たりて、かの二人の童（わらんべ）を、男子（なんし）をば男抱き、女子（にょし）をば女抱きて帰りけり。姫君、御覧じて、「如何（いか）なる者ぞ」と御尋ねありければ、乳母（めのと）承り、「彼（か）の二人の童どものためには父母（ちちはは）にて候ふ」と言ひければ、姫君、聞こし召され、「①何として自らには父ばかりありて母のなきぞ」と仰（おほ）せければ、乳母、泣く泣く申しけ[b]るは、「君三歳の御時、ア儚（はかな）くなり給ひ候ふ」と申しければ、中将姫は聞こし召され、「今までも知らざりけるこそ悲しけれ」とて、急ぎ父の御前に参り給ひて、「②如何なる人にても母の形見と見奉り、慰みなん」と仰せければ、豊成（とよなり）聞こし召され、「あまりに姫申すに」とて、その夏の頃より俄（にはか）に北の方迎へ給ふ。姫君は真（まこと）の母のごとく露ほども背き給はず、従ひ傅（かしづ）き給ふ。

その後、中将姫は貴き御僧を招（せう）じ、称讃（しょうさん）浄土御経を受けさせ給ひ、毎日に六巻づつイあそばし、母の後世菩提（ごせぼだい）を弔（とぶら）ひ給

へば、父豊成も御いとほしみは限りなし。北の方はこの姫を憎み給ひて、常には嘲り給ふ。豊成聞こし召し、「③継子、継母の習ひぞ」と、ただ大方に思ひ給へり。北の方は中将姫を失はん謀、明け暮れ案じ給ひけり。

姫君、十三にもならせ給へば、容顔美麗にして天下無双の人にて渡らせ給へば、帝よりは后に立ち給ふべき由、勅使、度々重なりければ、豊成も喜び給ひて、その御喜びは限りなし。A北の方は安からず思し召し、人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ、豊成に仰せけるは、「姫君如何なる事も出で来ん時、『生さぬ仲なれば』などと仰せられ候ふな。姫君の御方を忍びて御覧候へ」と、様々讒奏し給へば、豊成、ある日の暮れ方に、姫君の御方を北の方諸共に御覧ずれば、二十ばかりの男、直垂に折烏帽子着たるが罷り出でけり。

継母、豊成に仰せけるは、「日頃、妾が申しつcるは空言か。女の身の習ひ、一人に契りを結ぶは世の常の事。ある時は冠を着、装束の人もあり。ある時は立烏帽子に直垂着たる人もあり。またある時は薄衣引き被きたる者もあり。見れば、法師なり。かやうに数多に見え給ふ事の僂さよ」と空泣きしつつ仰せければ、豊成聞こし召し、「人の持つまじきものは女子なり。母最期の時、④強ちにいとほしみをなしつるほどに、如何にもして世にあらせんと思ひつるに、口惜しき振舞ひしけ

るこそ悲しけれ。明日（みやうにち）にもなるならば、この事漏れ聞こえ、禁中の物笑ひは豊成が女子にはしかじ」と思し召し、武士（もののふ）を召し、「汝（なんじ）、紀伊国有田郡雲雀山（ひばりやま）といふ所にて^B^頭（かうべ）を刎（は）ねよ。後の供養（きやうやう）をばよくよくせよ」と仰せければ、武士承り、「三代相恩の主君の仰せを背き申すに及ばず」とて、姫君を具し奉り、彼の山の奥に御供申す。大臣殿の御定の趣、詳しく申したりければ、姫君、聞こし召し、「^C^我、前世の宿業拙（つたな）くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず。さりながら、少しの暇（いとま）を得させよ。その故は、我七歳の頃より称讃浄土御経を受け奉り、毎日母尊霊（そんれい）に手向（たむ）け奉り、今日はいまだ読まず。且（か）つうは父の御祈りのため、且つうは母亡魂（ぼうこん）、出離生死（しゆつりしやうじ）・頓証菩提（とんしようぼだい）の御ため、または、自らが剣（つるぎ）の先に掛かりなば、修羅（しゆら）の苦しみをも免れ、浄土の道の導（しるべ）ともせん」と仰せければ、^D^武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける。

（「中将姫本地」による）

注
受けさせ給ひ……教えを受けてよくお守りなさって。
讒奏し……人をおとしいれようとして、悪口を申し上げ。
頓証菩提……すみやかに覚りを得ること。

問一　二重傍線部a～cの「る」について、それぞれ文法的に説明せよ。

a＝

b＝

c＝

問二　波線部ア「僂くなり」、イ「あそばし」は、ここではどのような意味か。現代語の終止形でそれぞれ答えよ。

ア＝

イ＝

問三　傍線部①～④を、必要な語句を補いながら、わかりやすく現代語訳せよ。

①＝

②＝

③＝

④＝

問四　波線部Aに「北の方は安からず思し召し、人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」とある。

1　北の方が「安からず思し召し」たのはなぜか。簡潔に説明せよ。

2　何のために、「人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」たのか。簡潔に説明せよ。

問五　波線部Bに「頭を刎ねよ」とある。豊成が姫を亡き者にしようとしたのはなぜか。六十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問六　波線部Cに「我、前世の宿業拙くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず」とある。

1　「人の偽り」とは何か。「人」が指す人物を明記して、具体的に説明せよ。

2　姫君は、「消えなん事力及ばず」とこの事態を受け入れる。それはなぜか。「前世の宿業」を解説しつつ、五十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問七　波線部Dに「武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける」とある。

1　「しばらく時をぞ移しける」とは、姫が何をする時間を取ったのか。具体的に説明せよ。

2　ここで、武士は何に心を動かされたのか。四十字以内で答えよ（句読点を含む）。

第三講

〔模範解答〕

問一　a　存続の助動詞「たり」の連体形の一部

b　過去の助動詞「けり」の連体形の一部

c　完了の助動詞「つ」の連体形の一部

問二　A　亡くなる　　B　読経なさる

問三　①　どうして私には父親だけがいて母親はいないのだ

②　どんな人であっても新しい母親を亡くなった母親の代わりと思い申し上げ

③　北の方が姫君のことを憎んでいることは、継子と、継母の関係ではよくあることだ

④　姫君のことをひたすら不憫に思う様子を見せたので

問四　1　憎い継子の姫君が天皇の后になるかもしれないことが腹立たしいから。

2　姫君には既に通っている男がいると豊成に思わせ、入内を破断にし、姫君を陥れるため。

問五　複数の男が姫君に通っていると思い込み、大事に育ててきた娘に裏切られたと思い、また、宮中で嘲笑されるのが嫌だったから。（五十八字）

問六　1　北の方が、複数の男が姫君の部屋に通っていると言い、豊成をだましたこと。

2　人の運命は前世の行いによって定まっており、自分の前世の悪行が原因で、逃れられない運命と考えたから。（四十九字）

問七　1　日課としていた称讃浄土御経を、両親や自分のために読経する時間

2　無実にも関わらず、死を受け入れ、両親の為に読経する姫君の信心深さと孝行の気持ち。（四十字）

〔現代語訳〕

そうするうちに、姫君〔＝中将姫〕が七歳と申す春の頃、桜が咲き乱れているのをご覧になると、幼い者が二人来て遊んでいるのを、三十歳くらいの男と、二十六、七歳の女がやって来て、その二人の子どもを、男の子を男が抱き、女の子を女が抱いて帰った。姫君が、ご覧になって、「どういう者だ」と尋ねなさったので、乳母がお聞きして、「あの二人の子どもたちにとっては父母でございます」と言ったところ、姫君は、お聞きになり、「どうして私には父親だけがいて母親がいないのだ」とおっしゃったので、乳母が、泣きながら申し上げたことは、「姫君が三歳のご時分に、お亡くなりになっています」と申し上げたところ、中将姫はお聞きになり、「今までも知らなかったのが悲しい」と言って、急いで父の御前に参上なさって、「どのような人であっても（新しい母親を）亡くなった母親の代わりと思い申し上げ、きっと心が慰められるだろう」とおっしゃったので、豊成〔＝中将姫の父〕はお聞きになり、「あまりに姫が申すので」ということで、その夏の頃から突然北の方を迎えなさる。姫君は本当の母のように（北の方に）少しばかりも背きなさらず、言うことを聞いて仕えなさる。

その後、中将姫は尊いお坊様を招き、称讃浄土御経の教えを受けてよくお守りなさって、毎日六巻ずつ読経なさり、実母の後世菩提を弔いなさるので、父の豊成も（中将姫を）不憫にお思いになることこの上ない。北の方はこの姫を憎みなさって、いつも嘲笑なさる。豊成はお聞きになり、「（北の方が姫君を憎むことは）継子と、継母の（関係では）よくあることだ」と、ただ普通のことだと思いなさっていた。北の方は中将姫を亡き者にしようとする企みを、いつも考えなさった。

姫君が、十三歳にもなりなさると、顔立ちはとても美しくて世の中に並びなき人でいらっしゃるので、天皇からは后に立ちなされとのこと（を伝えに）、勅使が、何度も回数を重ねたので、豊成も喜びなさって、そのお喜びはこの上ない。北の方は心穏やかでなく思いなさり、人を説いて協力させて、冠をかぶらせ、束帯を身に着けさせ、中将殿のお部屋へ出入りするふりをさせ、豊成におっしゃったことは、「姫君にどのようなことが起こったとしてもその時、『血のつながらない親子だから』などとおっしゃいますな。姫君のお部屋をこっそりご覧なさいませ」と、いろいろ人〔＝姫君〕をおとしいれようとして、悪口を申し上げなさるので、豊成が、ある日の日暮れ頃に、姫君のお部屋を北の方と一緒にご覧になると、二十歳くらいの男で、直垂姿に折烏帽子をかぶっている男が出て参った。

継母〔＝北の方〕が、豊成におっしゃったことは、「数日間、私が申し上げたことは偽りか。女の身の道理として、一人に

夫婦の約束をするのは世間の常識。ある時は冠をかぶり、束帯姿の人もいる。ある時は立烏帽子に直垂を着ている人もいる。またある時は薄い着物を頭からかぶっている者もいる。見ると、法師である。このようにたくさん（の男性）とお会いなさることの浅はかさよ」と嘘泣きをしながらおっしゃったので、豊成はお聞きになり、「人が持つべきでないものは女の子だ。（姫君の）実母が臨終の時、（姫君を）ひたすら不憫に思う様子を見せたので、どうにかして人に認められるように育て上げようと思ったのに、残念な振る舞いをしたことが悲しい。明日にもなったら、このことは世間に広まり、宮中の笑い種は私豊成の娘が一番になるだろう」とお思いになり、武士をお呼びになり、「お前が、紀伊国有田郡雲雀山という所で（姫君の）首を刎ねろ。死後の供養をしっかりとしろ」とおっしゃったので、武士は承知申し上げ、「祖父以来三代にわたって恩を受けた主君のご命令に背き申し上げることはできない」といって、姫君をお連れ申し上げ、その山の奥にお供申し上げる。大臣殿〔＝豊成〕のご命令の趣旨を、（武士が姫君に）詳しく申し上げたところ、姫君は、お聞きになり、「私は、前世からの因縁が劣っていて、人の偽りによってお前の手にかかり、命を失ってしまうことは仕方がない。そうではあるが、少しの時間を与えよ。そのわけは、私は七歳の頃から称讃浄土御経の教えを受け申し上げ、毎日実母の御霊に（読経を）手向け申し上げ、（しかし今日はまだ読経していない。一方では父のお祈りのため、一方では実母の亡魂の、出離生死〔＝悟りを開いて生死の苦から脱すること〕・頓証菩提〔＝すみやかに悟りを得ること〕のため、さらには、私が剣の先にかかったならば、争いの苦しみをも逃れ、極楽往生の導きともしたい」とおっしゃったところ、武士は（感情がない）岩や木ではないので、しばらく時間を置いた。